

久留米市都市計画事業

「花畑駅周辺土地地区画整理事業」に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

金丸遺跡Ⅱ

－ 第 3 次 調 査 －

久留米市文化財調査報告書 第174集

2001

久留米市教育委員会

序

久留米市では、21世紀の都市づくりの取り組みとして、「水と緑の人間都市」を基本理念に掲げ、新総合計画基本構想の具現化に、第一歩を踏み出しました。

その一役を担うべく、先人たちが積み重ね創りあげてきた歴史風土を、都市づくりに活かし、魅力ある歴史環境を未来へ継承することが重要と考えられます。

今回、快適な生活環境と、交通体系を確立するための「花畑駅周辺土地区画整理事業」地にも、先人たちの足跡の片鱗が認められました。なかでも、弥生時代の竪穴住居は、まさに地の利を活かしたムラづくりの原点と言えましょう。

調査の成果が市民の生活の中に息づき、郷土の歴史を学び、郷土への愛情が育まれることを切に望みます。

本書が、埋蔵文化財の理解・普及に寄与し、生涯学習の教材として、学校・地域で活用いただければ幸に存じます。

発掘調査に際して、多大なご協力いただきました地権者をはじめ、周辺住民の皆さまに心よりお礼申し上げます。

平成13年3月31日

久留米市教育委員会
教育長 桑 野 善 吾

例 言

1. 本書は、久留米市都市計画事業「花畑駅周辺土地地区画整理事業」に伴う『金丸遺跡』第3次発掘調査の記録である。
2. 発掘調査は、教育文化部文化財保護課の園井正隆（A区）、近澤康治（B～E区）が担当した。
また、追記の第1次調査G-1区は園井が担当した。
3. 本書に掲載した図面は、トータルステーションとカタタシステムを用いて図化した。
基準となる座標は、国土調査法第Ⅱ座標系を基にしている。
4. 図面の浄書は、米澤美詠子（非常勤職員）が担当した。
5. 掲載の写真は、調査担当者が撮影した。
6. 本書に使用した遺構表示は、下記の略号による。
SI…竪穴住居、SD…溝、SK…土坑、SP…ピット、SX…その他の遺構
7. 調査に関わる遺物や記録類は、久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。
8. 本調査の調査番号は、200007で、遺跡略記号は、KMR-003である。
9. 本書の執筆は、近澤・園井が担当し、編集は園井が行った。

目 次

I. はじめに	1
1. 調査の経緯	1
2. 調査体制	2
II. 位置と環境	3
III. 調査の記録	4
1. A区	4
2. B区	7
3. C区	10
4. D区	12
5. E区	14
IV. まとめ	18
V. 追 記 —第1次調査G-1区報告—	19

1. はじめに

1. 調査の経緯

久留米市都市計画事業花畑駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査は、平成11年度から実施している。平成12年度の調査にかかる文書が、建設部区画整理課より平成12年6月に提出され、これを受けて6月26日から調査を開始した。

平成12年度は、西鉄花畑駅南に当たる区域で、金丸遺跡調査対象地においては南部地区の調査である。調査は区画整理課の進捗に合わせ、随時調査を進めた。調査地は5地点を数える。都合上、A～E区と付した。

今年度は、調査地の南に金丸川を見下ろす丘陵端部の調査であるため、遺跡の実態をより把握できる地形と推察した。ただ、昨年度の調査と同様に、削平が進んでいないことを願いながら、作業を開始した。

調査の目的は、遺跡の性格・時代を確認することは言うまでもないが、旧地形と現地形の変化状態を把握することも重要と考えた。そのため、部分的に掘り下げて土層状態を観察を行うことにした。A～E区の5地点における調査期間および調査面積は、次頁の第1表にまとめた。金丸遺跡の調査対象面積が約17,200㎡あり、この内、昨年度が3,075㎡、今年度が1,067㎡で、約24%の調査を終えたことになる。



第1図 調査地点位置図 (1/2,000)

第1表 金丸遺跡第3次調査一覧表

調査区	A 区	B 区	C 区	D 区	E 区
期 間	平成12年6月26日 ┆ 平成12年6月30日	平成12年9月5日 ┆ 平成12年9月26日	平成12年10月6日 ┆ 平成12年10月13日	平成12年11月6日 ┆ 平成12年11月16日	平成12年12月11日 ┆ 平成12年12月22日
面 積	83 m ²	286 m ²	166 m ²	129 m ²	403 m ²

2. 調査体制

a) 調査主体

久留米市教育委員会

教育長	桑野 善吾
教育文化部長	山村 秀明
社会教育担当次長	芳司 定

調査総括

文化財保護課

課 長	関 知彦
課長補佐兼主査	萩原 裕房 (～10月)
課主査	堤 諭吉 (10月～)
事務主査	櫻井 康治・松村 一良
庶務担当	榎藤 節子
調査担当	近澤 康治・園井 正隆

b) 区画整理関係

久留米市建設部

部 長	西川 勝義
都市整備推進担当部長	合田 潤彦
区画整理課 課 長	真名子文男
計画主幹	梶原 武志
課長補佐兼主査	香月 司
技術主査	室岡 寛・田嶋 浩之

調査に際して、地権者および周辺の方々には、ご協力とご理解をいただき、円滑な調査を行うことができた。

今年度の調査に携わった発掘調査および出土品整理臨時職員は、下記のとおりである。

【発掘調査臨時職員】秋永絹子・上村初子・大淵文子・梶島理恵子・堤佐和子・原口妙子・馬場八重子・三小田美智子・村上令子・池田 周・園井健太郎・梅崎 惺・江崎キヨミ・城後やす子・津留崎利子・中村多津子・中村 廣・今村美津子・岡富士子・梶島ミドリ・柴田友子・藤 久子・福田ふくみ・良永洋子・良永美佐子・吉村智子・柳 鈴子・山田治代

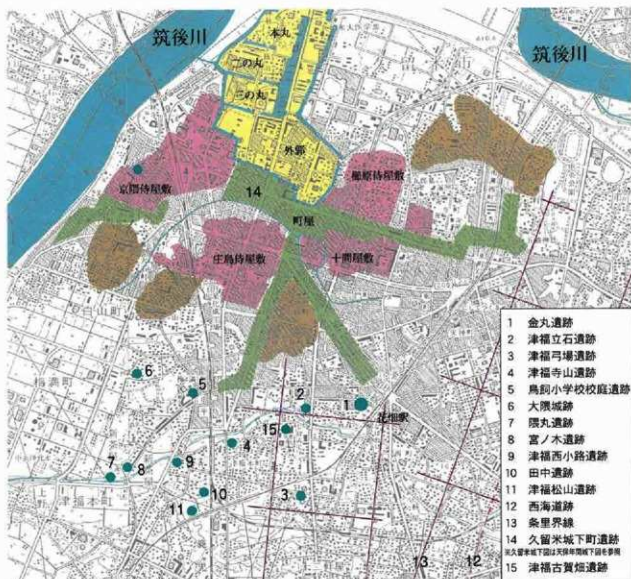
【出土品整理臨時職員】荒巻悦子・大村みき・小川執津子・小林留美・志賀良子・中嶋里美・中島千穂・福田澄子・宮原美由起・森山明恵

II. 位置と環境

金丸遺跡は、久留米市街地のほぼ中央に位置する。国道209号線と西鉄大牟田線に挟まれた部分に広がる遺跡である。「花畑駅周辺土地区画整理事業」に伴う事前の試掘調査を実施するまでは、遺跡を確認していなかった地区である。現在、事業が着工され、この地区の景観は大きく変わろうとしている。

遺跡の南側を金丸川が西流する。金丸遺跡から約3km下流でこの川は筑後川に注ぐ。全長7,376mの河川で、遺跡が存在する地域は中流域に相当する。金丸川の北岸に遺跡の広がりが認められ、その地形は段丘に、小規模な谷が幾本も入る地形を呈する。

周辺の遺跡として今回は津福古賀畑遺跡を紹介したい。本遺跡から下流へ600mの南岸に位置する遺跡である。一辺約5mの方形のプランを有する竪穴住居が平成5年度に検出されている。この竪穴住居は4世紀前半（古墳時代）の所産である。この遺跡の他、津福立石遺跡・津福西小路遺跡・田中遺跡など古墳時代の遺構・遺物が出土した遺跡が認められる。



第2図 遺跡分布図 (1/25,000)

III. 調査の記録

1. A 区

a) 調査の概要

区画整理事業の着工以来、西鉄天神大牟田線の花畑駅西側については、日を追うごとに景観が変化している。

今回の調査地となるA区は、平成11年度調査地のC-4区に北隣する。C-4区、およびC区の調査結果を見ると、散在するビットと溝が検出され、その上層では、土壌改良遺構が検出されている。遺構の残存状況はさほど良好な地区ではない。

A区の調査対象地は457.7㎡である。重機を用いて表土を剥ぐ作業中に、トレンチ壁面の肌落ちが認められたため、北側の道路との間隔を十分に空けて安全対策を講じた。したがって、調査面積は83㎡となり、実働3日間の調査であった。

表土からの深さを計測すると、トレンチの北東隅では約85cmで地山に到達する。その地山は南と西に向かって標高を下げている。トレンチの中央付近の黒色土を、さらに180cmほど掘り下げると湧水が著しく、遺構検出の作業中にも冠水するといった状況であった。

b) 検出遺構と出土遺物

A区の調査では、池状遺構・溝、およびビットを数個検出した。遺構検出面の直上に黒褐色土が堆積する。この上の層は近・現代の盛土である。

池状遺構

SX1 (第6～9図)

調査トレンチの東端から約2.5mで、地山が西に向かって緩やかに下がっており、黒色の埋土の広がりを認めた。埋土の外縁から内側に約100～160cmのところに木杭が打ち込まれ、その外側には竹が3段に重ね上げられた状態で出土した。南北方向と東西方向に折れるコーナー部を検出したもので、コーナー部の角度は約120度を測る。表面から約180cmで湧水が認められ、人力で掘り下げることは困難になったため、重機を用いて黒色の埋土を掘り下げたところ、湧水点からさらに1m下で青灰色のシルト層が現れた。池状遺構の埋土を観察すると、上・下層の2層に分かれ、上層は砂質が強く、下層は粘質が強いといった違いを確認した。

遺物は埋土内にも流れ込んだ形跡さえ認められず、全く出土していない。第1次調査で検出した溝(SD42)との関連については所見で触れてみたい。



第3図 調査区全景 (東から)

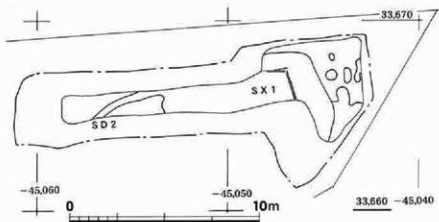


第4図 調査区全景 (西から)

溝

SD 2

調査トレンチの西側で検出した。東西に走行する溝で、埋土は黒色土で、池状遺構の埋土と同じ土質である。溝幅は46cmである。掘り下げると内へ湧水が激しくなり、発掘に耐え得る状態ではなくなったため、深さを把握できなかった。



第5図 A区遺構配置図 (1/200)



第6図 SX 1 (東から)



第7図 SX 1 (南東から)



第8図 SX 1延長状態 (南西から)

った。池状遺構から西に向かって延びるが、やや曲線的な走行状態である。

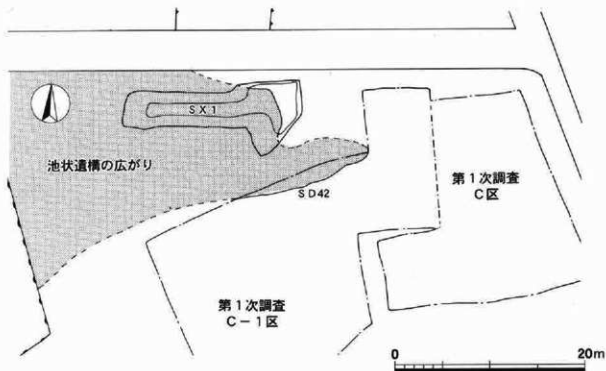
ビット

調査トレンチの東側で4個のビットを検出した。いずれも黒褐色土に、黄褐色土のブロックがわずかに混入した埋土である。

どのビットからも遺物の出土は見られなかった。

周辺状況

調査中に、工事に着工した周辺の土層を観察した内容を記しておきたい。調査トレンチの西側では、新設道路に伴う側溝の工事が実施されていた。側溝部に露出した土層は、昨年度調査地（C-4区）の北側に当たる。黒褐色土が厚く堆積した層は、C-4区のSD42の延長であると確認した。さらに、今回検出したSX1の埋土とも全く同一であることが判明したのである。また、調査トレンチの南西20m付近の工事の際も、黒褐色土が認められ、SX1の一連の広がりと考えられた。調査区外で調査の参考となる資料を得たのは複雑な心境である。



第9図 SX 1範囲図 (1/400)

c) 所見

A区の調査では、池状遺構の検出が大きな成果と言えよう。昨年度の調査の際に、地元の古老から教示を受けたことが脳裏をよぎった。それは、SD 42を検出した時のことである。「昔、この付近は水を引くことができなかった。それで、池を造って畑に水を引いていた。その後、灌漑用の水路ができた後は、池は埋められて畑に変わったと聞いている。」ここで言う池が、今回検出した池状遺構を指すとは断言できない。しかし、周辺の工事において確認した土層の状況と、昨年度の調査成果を踏まえると、池の存在については、推定の域に収まるであろう。ただ、一步踏み込んで、池の範囲や貯水を利用した畑との関わりについては、昨年度調査地のC区において検出した土壌改良遺構が挙げられるが、これも一資料としての扱いに留まる。

調査トレンチの北を東西に流れる灌漑用水路は、大正3年に完成しており、池状遺構が存在した時期の下限を示している。一方、上限については決定し得る資料がない。強いて参考にするならば、江戸時代後期に久留米藩内では、灌漑用の貯水池や水路の建設を行ったという記録である。この事業の一環として金丸地区に貯水池が造られたという推測もできないことはない。さらには、金丸稻荷神社の隆盛期といえる時期とも符合する。

A区を含む金丸遺跡の北部に当たる地域の調査資料が極めて少ない。今後、この地区の調査が実施される時点で、上記の推察を実証し得ることを期待したい。

参考文献

『金丸遺跡』久留米市文化財調査報告書第160集 2000 久留米市教育委員会

2. B区

a) 調査の概要

西鉄天神大牟田線線路南側の金丸遺跡第4次調査2区の南側を金丸遺跡第3次調査B区として調査を行った。調査地点は道路を挟んでおり、便宜上、東・西区にわけた。西区は南と北で約30cm程段差があり、西区西側及び南側は約4m程削られ、低くなっている。表土から遺構検出面までの深さは、調査区の北側で20～25cm、南側では30～40cmと深くなっている。調査は金丸遺跡第4次調査2区の調査終了に引き続き、平成12年9月5日より開始し、9月26日に終了した。

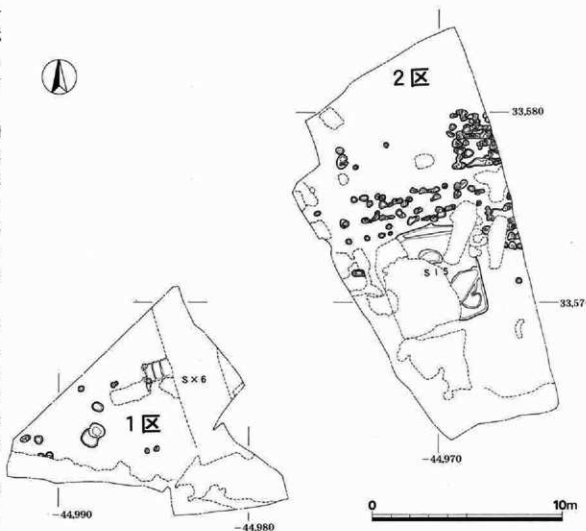
b) 検出遺構と出土遺物

B区の調査では竪穴住居・防空壕およびピットを検出した。東区は表土を除去すると黄褐色地山であり、かなり削られているものと思われ、西区は遺構検出面の直上に黒褐色土が堆積していた。しかしながら、東区では近代～現代の攪乱が数多く認められた。

竪穴住居

S15 (第13・14図)

東区の中央部南寄りで見出した。西側及び北西部は近代以降の攪乱が入り、全容は不明である。南東部のコーナー部分及び北辺の一部しか残存していないが、北辺の西端が南へ折れるため、北西部コーナーに近い部分と考えられる。このことから、この竪穴は長辺5.1m、短辺約4mを測る平面形が隅丸長方形のものであろう。床面はほぼ平坦であるが、あまり



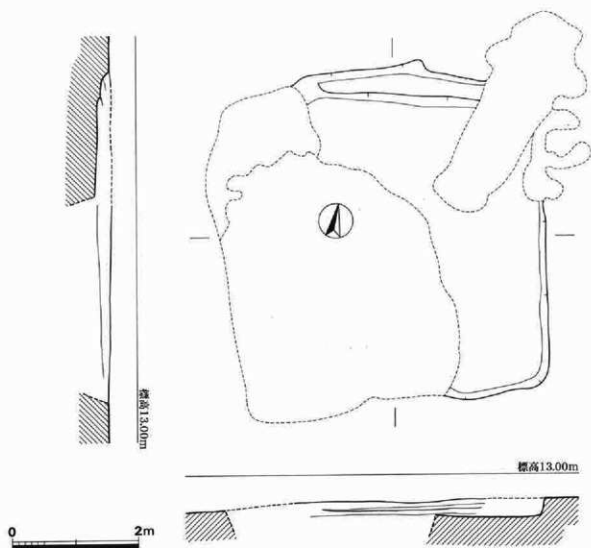
第10図 B区遺構配置図 (1/200)



第11図 B区西侧全景（東から）



第12図 B区東側全景（北から）



第13図 SI 5実測図 (1/60)

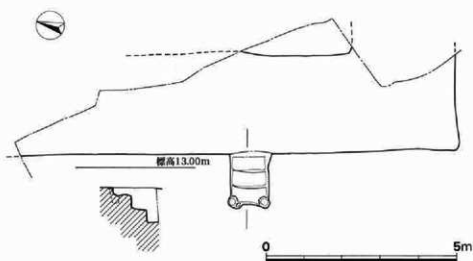


第14図 SI 5 全景 (北から)



第15図 SX 6 防空壕西入口 (西から)

踏み固められてはいない。北側壁沿いに幅約20cmの段を持つが、伴うものかは不明である。主柱穴は検出できなかった。壁高は約20cmで、埋土は黒褐色である。床面や埋土からの出土遺物は、皆無である。竪穴西側～南側及び北東部を新しいゴミ穴で切られてお



第16図 SX 6 防空壕実測図 (1/100)

り、断定はできないが、恐らく、長辺5.1m、短辺4m、壁高20cmを測る隅丸長方形の竪穴住居と考えられる。時期については不明ではあるが、線路を挟んだ北側の第4次調査3・4区で発見した弥生時代後期の竪穴住居があり、これと同時期のものかと思われる。

防空壕

SX 6 (第15・16図)

西区で検出した。調査区域外へ広がり、全容は不明である。第4次調査2区西側調査区まで含めると長さ11.2mを測り、北へ延びている。砂で埋められており当初道路かと思われたが、地元住人の方の話で、当該地に防空壕があったことが判明した。防空壕本体部分を機械で一部分掘り下げた結果、遺構確認面から1.5mで床面を確認できた。南側端は東へ直角に曲がり、調査区域外へと延びている。防空壕の入口は道路際にあったこともわかっていましたが、調査では確認できなかった。しかしながら、南端部から約5mの地点に防空壕に直行する階段を発見した。階段は3段分を検出し、遺構検出面で階段部分の両脇に柱穴を発見した。これらの遺構は防空壕に伴うものと考えられ、恐らく西側の入口と考えられる。

これらの遺構以外にもピットなどを検出したが、まとまるものはなかった。また、出土遺物としては、

土師器細片、近世～現代の陶磁器・瓦などがあるが、図示できるものはなかった。

c) 所見

金丸遺跡第3次調査B区では、竪穴住居跡1軒と防空壕を検出した。竪穴住居は線路を挟んだ北側、第4次調査1区から4区にかけて、6m×5m竪穴住居が発見されており、出土遺物から弥生時代後期の住居と考えられる。今回検出した竪穴も住居と考えられ、西日本鉄道天神大牟田線線路敷下を含む付近一帯に住居群があったものと推定される。

3. C区

a) 調査の概要

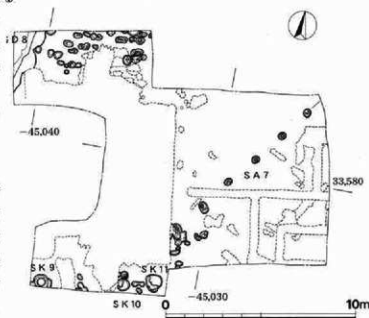
調査地点は、第4次調査1区の道路を挟んだ北側に位置している。今回の調査対象地は、東・西・南の3方向が道路に面しており、北側には隣接地とのブロック塀がある。このため約1mセッパッキ調査区を設定した。重機による表土剥ぎを開始した。遺構検出面までの深さは約30cmと浅く、攪乱が多い。特に調査区西側の大部分が攪乱を受けていた。遺構面は北西部に向かい傾斜し、最深部で60cmを測る。調査面積は166㎡で、平成12年10月6日より調査を開始し、10月13日に終了した。

b) 検出遺構と出土遺物

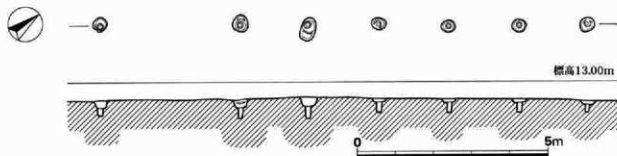
調査地点の南西約15mの地点で、弥生時代後期の竪穴住居を検出しているため、今回の調査では、その時期の遺構の広がりが見込まれていた。しかし、今回の調査地点はかなり削平されており、黒褐色の包含層も残っていなかった。C区で検出した遺構は、柵列1条、溝1条、土坑3基の他、ピットである。



第17図 C区全景（西から）



第18図 C区遺構配置図 (1/200)



第19図 SA 7実測図 (1/100)

出土遺物は、わずかながら土師器細片、中世の青磁が出土しているが、ほとんどの遺物は近世末～現代の陶磁器や瓦類である。

柵列

SA7 (第19図)

調査区の北東隅から、調査区を斜めに横切るような柵列を検出した。全長12.6mを測るが、調査区域外へ広がる可能性もある。7間分(1.8m等間)を検出したが、南から2番目のビットは、攪乱に切られており、検出できなかった。柱掘形は40cm前後の円あるいは楕円形で、深さは30～50cmを測り、20cmほどの柱痕跡が見られた。埋土は灰褐色で、柱痕跡部分の一部は埋りきっていないものもあった。掘形内埋土から古伊万里の細片が出土している。

溝

SD8

調査区の北西隅で東岸を検出した。段落ちかとも思われたが、道路を挟んだ西側のD区で溝を検出し、その延長線になるため、溝として取り扱うことにした。南北方向に3.6m分を検出し、深さは約45cmを測る。埋土は暗褐色で、近世末頃と考えられる陶磁器が出土した。

土坑

SK9

調査区南西隅で検出した径約70cmの平面形が円形を呈する土坑である。調査区域外へ広がってはいるが恐らく円形を呈するものであろう。二段掘りされており、下段は径約40cmの円形である。深さは約20cmである。床面は、ほぼ平坦である。埋土は黒褐色であり、古いものかと思われるが、出土遺物がなく、時期の決定はできない。

SK10

調査区南側西寄りで検出した。西側を攪乱で切られているが、径約70cmの円形を呈している。西側に掘り込みが見られるが、伴うものか不明である。深さは5cmと浅く、埋土は暗褐色で、遺物は出土していない。

SK11

調査区中央部南端で検出した長軸90cm、短軸70cm、深さ10cmを測る楕円形の土坑である。西側に不整形な掘り込みが検出された。埋土は暗褐色で、出土遺物はない。

c) 所見

今回の調査では先にも述べたように、弥生時代の住居の広がりが想定されていたが、調査区域のほぼ半分が攪乱されており、また東側についても削平されているらしく、黒褐色土も堆積していなかった。しかし調査区を斜めに横切るような柵列や溝、土坑などの遺構は検出された。これらの遺構の内、柵列については、当初建物と考えたが、対応する柱掘形もないため、柵列として扱った。この柵列の埋土は灰褐色で柱痕跡は埋りきっておらず、出土遺物からしてかなり新しいものと考えられ、幕末～明治の時期と推定される。溝については、調査区域の北西部にわずかにかかっているだけではあるが、出土遺物に幕末と考えられる遺物が入っており、柵列とはほぼ同時期のものであろう。土坑については、埋土が黒褐色あるいは暗褐色を呈しており、弥生～古墳時代のものかとも考えられる。しかしながら、遺物がまったく出土しておらず、時期については不明である。

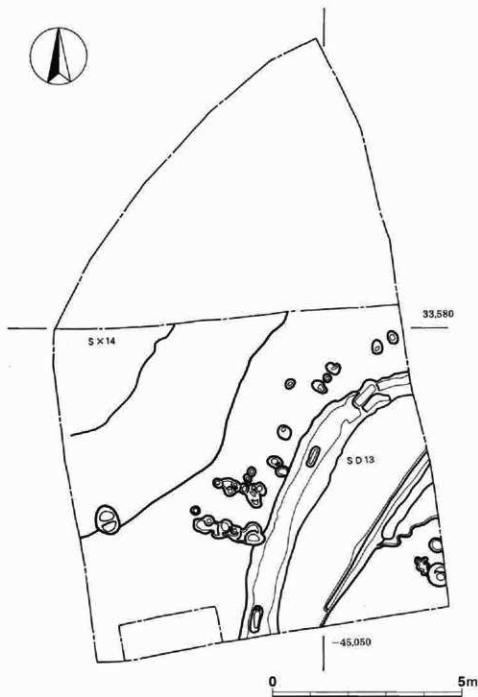
4. D区

a) 調査の概要

金丸遺跡第3次調査D区は、C区の道路を挟んだすぐ西側に位置する。調査地点のすぐ西側は約2m程低くなり、その西側に水路があり、その水路は調査区の北側から流れてきている。このことから調査区域の西及び北側はかなり埋め立てられたものと考えられ、かなりの土量ができるものと想定し、西側は危険防止のため約1.5mの緩衝地帯を設け、北側は表土を剥くだけで止め、時間と排土置き場の都合で掘り広げ

ることとした。

調査は平成12年11月6日より開始し、11月16日に現地作業が終了し、11月24日に埋め戻した。遺構検出面は、調査区の南東側で表土から約20cmと浅く、西へは緩やかに傾斜していた。北側へは徐々に深くなっていく。重機で黒褐色土が出るまで掘り下げ、その後、人力で掘り下げをおこなった。その結果、溝1条（谷？或は落ち込み）ビットなどが検出された。落ち込み部分は地表面から2.5m掘り下げたが、底に達せず完掘をあきらめた。また調査区の北半



第20図 D区遺構配置図 (1/100)

区の北半分は排土置き場の関係で、掘り下げなかった。調査面積は129㎡である。

b) 検出遺構と出土遺物

D区の調査で検出した遺構は溝1条、谷状遺構の他、ピットである。出土遺物は土師器細片、青磁・白磁、近世陶磁器、瓦などである。

溝

S D 13

調査区南東側で検出した。2段掘りの溝で東側岸は直線的に延び、C区北西端につながるものであろう。西側岸は弧を描きながら、北東へと流れている。西側岸部分は1段下がり、溝状を呈し二段掘り状をなす。東側の岸からすると西側岸は約20cm程低いため一連の溝でなく、東側は段落ち、西側は段落ち下を取り巻く溝とも考えられるが、土層断面を見るかぎり、埋土は同一であり、ひとつの溝とした。溝幅は2.0～2.8m、深さ約20cm、長さ約7m分を検出した。一段深い西側の溝底部分には長さ60～80cm、幅20～35cm、深さ20～40cmの長円形の掘形が3個あり、一部溝と切り合い関係にあるが、溝を意識しているものと思われる。



第21図 D区全景（北から）

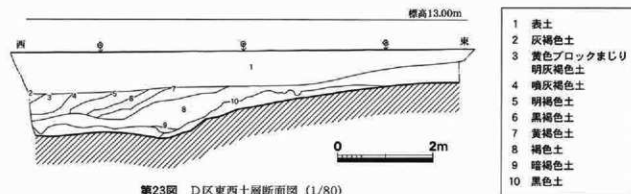
谷状遺構

S X 14

調査区の北西側で検出した。溝S D 13の西側岸の西側の平坦面で黒褐色土の広がりを検出したため掘り下げをおこなった。その結果西方向に徐々に地山が下がっていった。遺構検出面から約1m、地表面から2.7m掘り下げたが、底に達せず、完掘は断念した。出土遺物は灰褐色土からは近世陶磁器や瓦が出土し、黒褐色土からは土師器細片、中世の青磁・白磁、磁、その他、石鏃が2点出土した。



第22図 D区東西土層（南から）



第23図 D区東西土層断面図 (1/80)

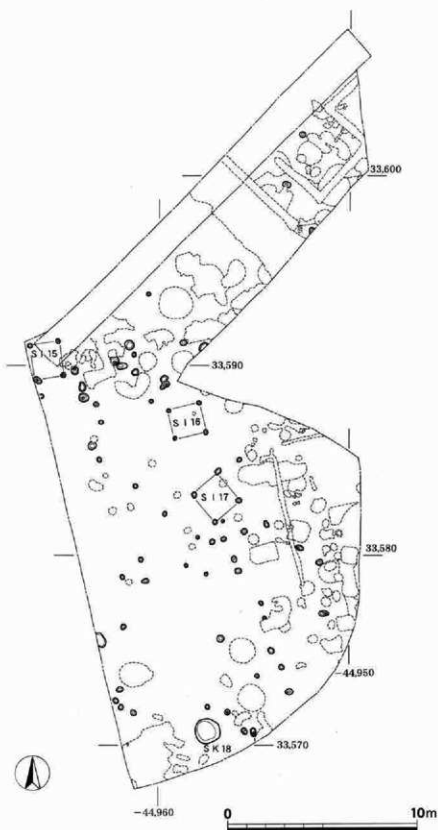
c) 所見

D区の調査では溝と谷状遺構を検出した。谷状遺構は南側隣接地を通り、第4次調査1区西側の谷へつながるものであろう。溝はC区の北西端の溝につながるものと思われる。

5. E区

a) 調査の概要

金丸遺跡第3次調査E区は西鉄天神大牟田線花畑駅の南西側に位置する。西側隣接地は第3次調査B区、第4次調査2区で、調査地の北側は、第4次調査5区である。E区の調査は第4次調査5区の調査終了後、引き続き調査を始めた。金丸遺跡がある丘陵の南端部に位置し、南側に金丸川が西流する。今回の調査では、弥生時代後期の住居の広がりが想定されていた。調査は平成12年12月11日より重機を入れ調査を開始した。排土置き場は道を挟んだ北西側にしかなく、2tダンプで排土移動を行ったため、表土剥ぎに時間がかかった。第4次調査5区部分は埋め戻しは行わなかった。調査区の北側は遺構検出面まで約30cmと浅かったが、南東側は遺構検出面まで60cmと深くなっていった。



第24図 E区遺構配置図 (1/200)

調査区の北東側は西鉄の線路が走り、また西及び南側には約2mの石垣があり、その下に道路が通っているため、約2mの畦をもうけた。調査面積は403㎡で、平成12年12月22日に現地作業を終了した。

b) 検出遺構と出土遺物

金丸遺跡第3次調査E区は西側隣接地の3次調査B区で検出した竪穴住居などの遺構の広がりが想定されていた。調査区の北半部は表土を除去するとすぐに遺構検出面であり、11月に解体された住居の関係で攪乱がいたるところに入っていた。遺構検出面が徐々に下がり、南端部では表土下約60cmで黄褐色地山面に達する。この地点での層序は表土が約20cm、灰褐色土約20cm、暗褐色土10cm、黒褐色土約10cmである。攪乱以外の遺構の埋土は、灰褐色・暗褐色・黒褐色であり、灰褐色の埋土の遺構からは江戸時代末頃の陶磁器などの遺物が出土しており、灰褐色の埋土のビット類は近世のものであろう。暗褐色及び黒褐色の埋土の遺構からは、土師器細片が出土してはいるが時期については不明である。また、栗石を持つ浅いビットも検出したが、時期的には昭和の初めの頃のものと考えられる。また今回の調査区は北側がトレンチ状で南側はひろがっており、北側トレンチ部を北区、南側を南区として報告したい。



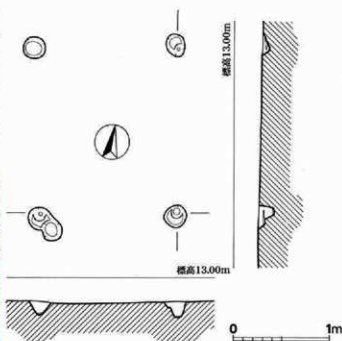
第27図 S I 15全景



第25図 E区北側（西から）



第26図 E区南側（北西から）



第28図 S I 15実測図 (1/40)

今回の調査で検出された遺構は4本柱建物（竪穴住居跡の主柱穴か？）3軒、土坑2基、ピットの他、樹木倒壊痕6基である。このうち樹木倒壊痕については、掘り下げを行わなかった。また出土遺物については土師器細片、青磁・白磁片、近世陶磁器、瓦などが出土しているが、図示できるものはなかった。

竪穴住居

竪穴住居の主柱穴と思われる4本柱を3軒分検出した。

S I 15（第27・28図）

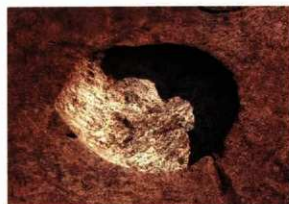
調査区の北西隅で検出した。4次調査5区の西端で黒褐色のピット1個を検出しており、その南



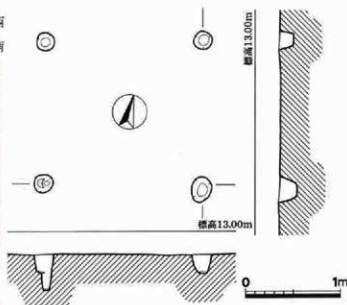
第29図 S I 16全景



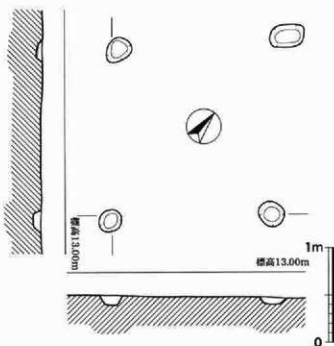
第31図 S I 17全景



第33図 SK 18全景



第30図 S I 16実測図（1/40）



第32図 S I 17実測図（1/40）

側と南西側に2個検出したため、調査区を拡張し、4本柱の建物になることを確認できた。柱掘形は径20~25cmの円形あるいは楕円形で、北西隅のビット以外は、径10~15cmの柱痕跡が見られた。深さは10~15cmと浅く、柱間は南北1.7m、東西1.43mで、方向はN-9°-Eを測り、埋土中から遺物は出土していない。

S I 16 (第29・30図)

S I 15の南東側、南区の北側中央部で発見した4本柱の建物である。径20cm前後の柱掘形で、南西側ビットには径約10cmの柱痕跡が検出された。深さは15~30cmで柱間は南北1.5m、東西1.65mを測る。方位はN-12°-Eで、埋土は、黒褐色を呈しており、埋土中から遺物の出土はなかった。

S I 17 (第31・32図)

南区の中央部北よりで検出した。S I 16の南約5mの地点に位置する。径約20~25cmの円ないし楕円形で、深さは15~40cmを測る。柱間は南北1.5m、東西1.65mで、方位はN-40°-Eである。若干北東のビットがずれるが、4本柱として扱った。柱穴内埋土は暗褐色で、他の住居と時期が異なるものと思われるが、出土遺物が皆無で、時期の決定はできなかった。

土坑

SK 18 (第33・34図)

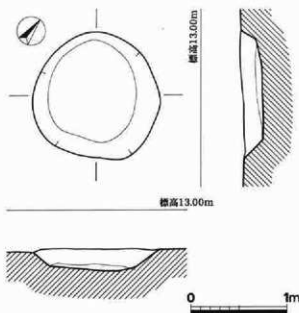
南区南西部で検出した土坑である。平面形は径約1.3mのややいびつな円形で、深さは約20cmを測る。底はほぼ平坦で、埋土は黒褐色を呈していた。埋土中及び床面からの出土遺物は土師器細片しかなく、時期の決定はできなかった。

SK 19

南区南西側で検出した。調査区域外へ広がり、全容は不明である。長軸80cm、短軸50cm分を検出した。恐らく平面形は楕円を呈するものであろう。深さは10cm前後と浅く、底は平坦である。埋土は暗褐色を呈しており、埋土中や床面からの出土遺物はなかった。

c) 所見

E区の調査では竪穴住居の主柱穴と考えられる4本柱建物3軒分と土坑2基、樹木倒壊痕6基の他ビットを検出している。しかしながら出土遺物は前にも述べたように、土師器細片、青磁・白磁細片の他は近世以降の陶磁器や瓦であった。樹木倒壊痕については、遺物の出土も想定できず、時間的にも余裕がなかったため掘り下げは行わなかった。竪穴住居の痕跡と考えられる4本柱は3軒分検出し、西側隣接地であるB区検出のS I 5との関連も考えられる。しかしながら、S I 5も今回検出の住居も遺物が出土しておらず同時期のものか不明である。また、4本柱周辺では踏み固められたような硬化面もなく、炉あるいは竈の痕跡や焼土も検出できなく、柱の深さも10~20cmと浅かった。このことから、当該地の北から中央部にかけてはかなり削平されたものと考えられ、調査区の南側に暗褐色や黒褐色の包含層と思われる土が



第34図 SK18実測図 (1/40)

残っており、南側については徐々に地山面が下がりっており、西及び南側は道路で切られはいるが、当該地が金丸遺跡の南端部に当たるものと想定される。

IV. ま と め

金丸遺跡第3次調査では、A～Eの5区に分け調査を行った。A区は遺跡の中央部西側に位置し、B・E区は南東側、C・D区は南西側に当たる。昨年度の調査では約3,000㎡の発掘調査を行い、江戸～明治時代の溝や土坑などを検出した。そこで、今年度の調査においても、同様の遺構が考えられた。今年度の調査では竪穴住居4軒・柵列1条・溝2条・土坑4基・池状遺構・谷状遺構などを発見した。この内、竪穴住居はB・E区で検出した。S15は半分以上攪乱されていたが、5×4mの方形プランであることが確認された。しかし、出土遺物がなく、時期についてはあきらかにできなかったが、第4次調査1・4区検出の竪穴住居の埋土と同じであり、主柱穴が2本と推定されることから、弥生時代後期のものであり、西鉄天神大牟田線の線路下一帯に住居群が広がっていたものと思われる。E区検出の竪穴住居はかなり削られており、主柱穴と思われる4本の柱しか検出されなかった。これら3軒分の4本柱は、先述の竪穴住居より後の時代のもと考えられ、古墳～奈良時代のものであろう。土坑についても、出土遺物がほとんどなく、時期については不明であるが、土坑内埋土が黒褐色のものは弥生、暗褐色のものは古墳時代のもので推定しているが、確証はない。C区で検出した柵列は、出土遺物から幕末～明治頃のものであろう。調査区を斜めに横切るように検出したが、西半分には攪乱が入り、北側は調査区域外であるため、もしかすると掘立柱建物になるものかもしれない。



第35図 区画整理事業途中の花畑駅南側風景（南から）

V. 追 記

— 第1次調査 G-1区 —

金丸遺跡第1次調査のG-1区は、平成12年1月13日から1月23日まで実施した。平成11年度の報告書に掲載の予定であったが、時間の都合上締め切り期日に間に合わず、平成12年度の調査報告書に追記という形で掲載することにした。以下、調査の記録を記し、報文としたい。

1. 調査の概要

G-1区は、D区の南に位置し、穏やかな丘陵上位に当たる。東側にはE区を見る。D・E区ともにG-1区に近い部分では、攪乱や削平によって荒れた遺構検出面であった。調査トレンチと排土の置き場を調査対象地内で賄わねばならず、必然的に調査面積を圧迫しなければならなかった。したがって、調査面積は48㎡となった。

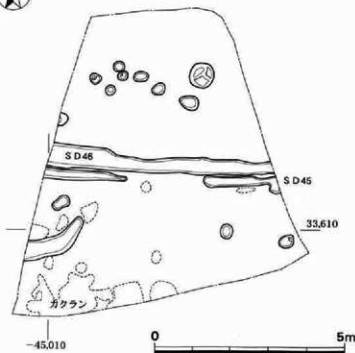


第36図 G-1区調査風景（北から）

2. 検出遺構と出土遺物

遺構検出は、南から北に向かって標高を下げている。調査トレンチの東壁では約20cmの比高差であり、西壁では80cmに近い傾斜が認められた。

検出した遺構は、溝4条、ピット12個である。



第37図 G-1区遺構配置図 (1/100)

溝

S D44

調査区の南西隅で検出した。南北走行の溝で、東端部がやや北に向いて終息する。溝幅は50～55cmで、深さは5cmを測る。底面は東から西に下がる。埋土は暗褐色土の1層であった。遺物の出土は見られなかった。

S D45

調査区の中央で検出した。溝は約2m途切れた部分を持つが、埋土の状態や規模から判断して、同一の溝と考えられる。西側溝の検出長は320cm、東側溝の検出長は200cmである。さらに、溝幅は11～28cmと16～28cm、深さは3～5cmと



第38図 G-1区全景（北上空から）

2 cmを測る。埋土はともに黒褐色砂質土である。底面の標高は両者とも同様な数値である。東西走行の溝内から遺物の出土はない。

SD46

SD45の北で検出した東西走行の溝である。溝幅は32～62cm深さも2～10cmと一定しない。底面は平坦な部分と船底形を呈する部分がある。また、底面傾斜は西から東へ下がる。埋土はSD45と似ているが、SD46がやや暗い土色である。この溝も遺物の包蔵は認められなかった。

ビット

調査区内で12個のビットを検出した。SD46の北側に9個のビットが集中している。しかし、建物を構成するものであるか判断できない。南側には3個程ビットを検出した。全てのビットからも遺物の出土はなかった。

3. 所見

G-1区の調査を終えて、検出した遺構から全く遺物が出土しなかったことは、残念であり、驚きでもあった。調査区の面積が狭いことに起因するものなのか。先にも記したように、周辺の調査においても検出面の状態が思わしくなかった。旧地形の削平が大きな原因と言えよう。平成11年度のD区の調査によって、D区の南西部に谷が存在していたことを確認している。G-1区においても北西隅が急激に下がった地山を検出している。この谷の地形を追うと、本調査区に北隣する道路が該当し、さらに、江戸期に創建された金丸神社へと続く道でもある。谷沿いもしくは谷を埋め立てて建設された道路と言えよう。つまり、調査区周辺は、すでに切土と盛土によって宅地へと変貌してしまった地区である。遺構の検出・分析には慎重さが要求される。



第39図 SD45・46（東から）



第40図 G-1区および周辺風景（北上空から）

報告書抄録

ふりがな	かなまるいせき だいさんじちようさ							
書 名	金 丸 遺 跡 Ⅱ 一 第 3 次 調 査 一							
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第174集							
編 著 者 名	園 井 正 隆 ・ 近 澤 康 治							
編 集 機 関	久留米市教育委員会							
所 在 地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 ☎ 0942-30-9225							
発行年月日	西暦2001年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 経	調 査 期 間	調査面積	調 査 の 原 因
かなまるいせき 金 丸 遺 跡	ふくろめがけくまのまち 福岡県久留米市 にしまち 西町1436-3 他	40203	遺跡番号	33度 18分 03秒	130度 33分 38秒	2000年6月26日 ～2001年3月31日	1,067㎡	花畑駅周辺土地 区画整理事業に 伴う事前調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
金 丸 遺 跡	集 落	弥生時代	竪穴住居 1軒		石鏃		金丸川中流域で弥生時代 の集落跡を検出。	
		古墳時代	竪穴住居 3軒					
		江戸～ 明治時代	池状遺構 1基 溝 2条 櫓列 1条 土坑 4基		土師器・青磁・白磁 近世陶磁器・瓦		江戸時代の灌漑用溜め 池を検出。	

久留米市都市計画事業
「花畑周辺土地区画整理事業」に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

金丸遺跡Ⅱ — 第3次調査 —

久留米市文化財調査報告書 第174集
発行 2001年3月31日

編集 久留米市教育委員会 教育文化部
文化財保護課

発行 久留米市教育委員会
〒830-8520 久留米市城南町15-3

印刷 服部印刷株式会社
〒830-0048 久留米市梅崎町410-1